

## さまざまな藩札

## 江戸期藩札の流通実態

松山大学経済学部教授 岩橋 勝

わが国の紙幣の歴史をひもとくと、一六〇〇年頃、伊勢山田地方で流通した「山田羽書」<sup>はがき</sup>がその起源とされます。そこから近畿地方を中心に有力商人が発行した私札が流通していきましたが、三貨制度の下、江戸幕府により山田羽書を除いて規制された初期の私札は、一七世紀後半にはほぼ姿を消します。一方、全国的に増大する通貨需要や、地方経済における信用取引の発達を背景に、藩の財政赤字の補てんや貨幣不足を補うため各藩が発行したさまざまな藩札については、幕府は容認せざるを得なかったようです。藩札は地域差が大きく、極めて多種多様。今回は、松山大学の岩橋勝先生に、当時の流通実態を通じて、藩札について詳しくご説明いただきました。

監修／東京大学大学院総合文化研究科准教授 桜井英治

## 藩札の始まり

現存する最古の藩札とされる「越前福井藩札」(貨幣博物館所蔵)。江戸時代に諸藩が発行した紙幣は、その額面表示の種類によって、金札・銀札・銭札・米札などと呼ばれていた。

わが国ではじめて全国一元的に流通した「政府紙幣」は一八六八年発行の太政官札ですが、その前身とみなされる藩札の発行は、一七世紀中期までさかのぼれます。江戸幕府発行の金・銀・銭三貨がありながらなぜそれが必要とさ

れ、早い時期から発行されたのでしょうか。

これまでの研究史では、一六六一年に越前福井藩が発行したものを最初の藩札とながく見なしてきました。しかし実物は存在しませんが、水野氏時代の備後福山藩で一六三〇年の藩政史料に銀札が新たに発行された記録があり、その

ことが近年熊本

藩などの第三者史料でも確認されて、より早期に使われ始めたことがわかってきました。

ただ、大坂町人学者で金融商・

鴻池別家当主でもあった草間直方(鴻池伊助)は江戸期貨幣や物価に関する膨大な著作『三貨図彙』<sup>ずい</sup>を一八二〇年代に完成させましたが、藩札の始まりについては「延宝・天和(一六七三―一八三)ノ頃迄ハ其例ヲ不聞、元禄五・六(一六九二―一七三)年頃ヨリ諸侯ノ国ニテ用度乏ニ仍テ始テ起ル」と述べています。今日、それまでに少なくとも二〇藩以上で発行事実が確認できていますので、当時の専門識者によっても江戸前期の藩札発行は広く認識されておらず、藩経済への影響もさほどではなかつ

たことがわかります。

その一方で、一七世紀初頭より、伊勢の宇治山田地方や畿内の大坂近辺では小額の貨幣不足もあつて、信用ある発行元による銀札が局地的に使用されてきました。三貨で統一したい幕府は神領の山田羽書を除いてそれら私札への規制を強めたので、一七世紀後半には姿を消し、かわって徐々に全国各地で藩札が発行され始めたわけです。

## 西の銀札、東の金札？

一八六九年の明治政府調査によれば、全国で二〇七藩の藩札が使用されてきました。当時、大名領は

■表1 江戸期藩札の時期別・地域別発行状況

	近畿	中国	四国	九州	中部	関東	東北	計
宝永4年以前 (～1707)	13	12	5	7	6	1	3	47
享保15年～宝暦8年 (1730～1758)	18	8	4	7	3	1	1	42
宝暦9年～慶応3年 (1759～1867)	20	8	2	9	14(1)	11(11)	8(5)	72
年次未詳	7(2)	2	2	4	5	0	0	20
計	58(2)	30	13	27	28(1)	13(11)	12(5)	181

出典：鶴岡実枝子「藩札」(龍澤武雄他編『貨幣』東京堂出版、1999)137頁。  
注：表内のカッコ数値は、西日本にある飛地のみでの流通を示す。

■表2 但馬出石藩銀札発行内訳

額面	1730年10月		1802年3月		銀 額
	枚数	全体に占める割合	枚数	全体に占める割合	
10匁札	12,000枚	12%	14,078枚	4%	140貫780匁
5匁札	14,000枚	14%	71,282枚	18%	356貫410匁
1匁札	16,000枚	16%	166,535枚	42%	166貫535匁
5分札	18,000枚	18%	83,569枚	21%	41貫784匁
3分札	20,000枚	20%	40,311枚	10%	12貫093匁
1分札	20,000枚	20%	23,972枚	6%	2貫397匁
計	100,000枚 (200貫目)	100%	399,747枚	100%	720貫000匁

出典：「出石銀札通用始末」（出石藩政史料）



貨幣の経済史や、物価と経済変動の歴史がご専門の松山大学経済学部経済学科教授岩橋勝先生。経済学博士。ご著書に『近世日本物価史の研究』（大原新生社）など。

二七〇ほどありましたので、八割近くで藩札が流通していたことになります。数字上は幕末期までに国内全般で藩札が使われるようになったかに見えますが、相当に地域差があり、多様性もありました。まず、東日本の金遣い、西の銀遣いといわれるので、東日本では

金札が多かったかということ、表1に示すように、藩札そのものがまれでした。存在が確認されても、西日本に

飛地を持ち、そこでのみ流通したものであったり、多くは明治期に入ってから新規に発行されたりしたものであることがわかります。

なぜ藩札は西日本で多く流通したのでしょうか。これまで多くなされてきた説明は、東日本よりも経済発展度が高かったため、貨幣需要が多かったというものです。これに対して、例えば盛岡藩のように、山間地が多く米産高のわりに他の商品生産の多かった地域では幕府の貨幣が流入しやすかったため、藩札をさほど必要としなかったという見解もあります。しかし西日本でも山間地は多く、種々

延宝二（一六七四）年来、但馬出石藩で発行された「出石藩銀札」の一〇匁札（左）と、領内で最も流通していた一匁札（右）（貨幣博物館所蔵）。



の商品生産が展開した地域も少なくないので、決定的な説明にはなりません。

基本的な要因は、銀遣いの特性にあります。金遣いの東日本では、庶民レベルで日常的に使用される貨幣は実は銭貨だったのです。一九世紀に入って、金貨の単位を持つ小額の計数銀貨（南鐐式朱銀等）が普及するまで、最小の流通金貨は小判の四分の一の一分金（現在の一万円以上の価値）であり、それが日常生活で利用されることはほとんどありませんでした。銭貨が主に江戸を中心とする東日本で多く製造されたのも、そうした事情によるものかもしれません。これに対し、銀貨は丁銀のみでなく、豆板銀といわれる不定重量の小粒銀が広く使われ、一匁（現在の一千円前後）未満の小額銀貨も少なからず使われていました。

それにしても小額通貨不足が常に生じていたことは否めません。銀札の額面でどのあたりが最も需要されたか、表2を見てください。幕府が一七三〇年に藩札発行を一部解禁した時の但馬出石藩（五万八千石）での額面別発行枚数は、

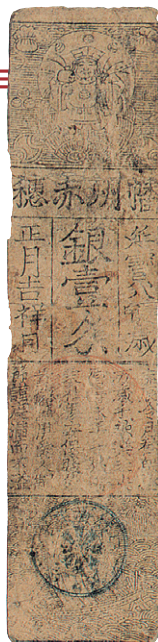
発行総額が二〇〇貫目になるよう、一・二・三万枚で適当に割り振られています。一八〇二年の内訳はその後の領内需要動向に応じて藩が増発した結果を示していると判断できます。一匁札が全体の四〇%以上の枚数で突出し、ついで五分、五匁札と合わせた三種額面が全体の八〇%にも達していました。このような状況は他藩でも確認できます。つまり、藩札は日常使用することの多い額面がより多く受容され、藩の一存で発行されても、円滑には流通し難かったことを示しています。

## 藩札流通を支えた条件

かつて藩札の性格をめぐって、信用貨幣か、藩の強制通用力で支えられた政府紙幣か、という論争が戦わされました。この際、「信用」概念、とりわけその範囲を広義、狭義のいずれでとらえるかにより解釈は大きく異ならざるを得ません。極端な話、発行当初はどこでも領内における「藩の威光」という「信用」に基づいて流通したわけですから、すべての藩札は信用貨幣ということになります。逆に、



播磨赤穂藩延宝札(貨幣博物館所蔵)。元禄14(1701)年の赤穂藩浅野家改易の際、大石内蔵助は藩札を額面金額の6割相当の幕府貨幣で引き換え、赤穂経済の混乱回避に努めた。非常時での6割償還は他に例を見ない善政と言われ、忠臣蔵の一場面としても描かれている。1707年、幕府が一時的に藩札の使用を禁止した際は、2割償還したにすぎない藩もあり、「千早振る紙札きかずたった二分、かねくれないに下困るとは」という領民の歌が残されている。



「銀行が振り出す兌換銀行券」というように厳密に定義すれば、江戸期にはまったく流通していなかったことになります。

問題は、概念定義も大切ですが、藩札がいったいどのような条件を備えておればより安定的に流通し得たか、ということです。その発行動機が財政赤字補てんであろうと、通貨不足であろうと、共通する領内での受容条件があったはず。基本的には、札価が維持され、いつでも正貨と交換できることでしょう。同時に領民にとって劣らず望まれたことは、日常的に使い慣れた通貨であることで、それは先に確認した額面のほか、貨幣の種別にかかわります。

西日本は「銀遣い」といわれていますが、これは畿内およびその周辺でのことで、中国・四国・九州では相当に複雑な様相を呈していました。領主財政や領外取引を主とする商人は銀遣いであっても、城下町や農村地域では江戸後期でも錢遣いのままであった地域が少

なくなかったのです。日常的に錢を使い慣れている領民に対し、藩の都合で銀札使用を強制されても相当使い勝手の悪さがあったことは否めません。逆にある程度銀遣いが浸透していたところ、あるいはさほど貨幣経済化が進展していなかったところでは藩札発行を契機に、それが領内の一般的な通貨として浸透することもあったでしょう。このように西日本では、藩札の受け入れ状況は実にさまざまであったのです。

### 錢匁札の語る謎

かつて西日本の藩札は大半が銀札と見なされていたのに対して、近年、錢匁札の流通を無視できないことがわかってきました。錢匁札とは、券面が「錢〇匁(分)」というように、銀貨の単位の「匁」が書かれ、一見銀札表示に見えながら実は「錢札」で、一匁が錢何枚にあたるかは地域により固定していたり、錢相場により変動したりする札です。畿内周辺では、播磨で多種確認できるほか、紀州田辺、丹後・但馬地方でも散見でき、これらは札の内実錢量が変動する

錢匁札でした。ところが、備中の一部、徳山・岩国の支藩を含む長州藩領全域、伊予・土佐全域の中国・四国、そして薩摩藩領と日向を除く九州全域では一八世紀中期より一九世紀初頭にかけて内実固定型の錢匁札が広範に流通していたのです。例えば長州藩領では八〇文、松山藩領では六〇文と固定されていました。

錢匁札発行に先立って錢匁遣い(「錢〇文」ではなく、各地それぞれに異なる一定枚数の錢貨を一匁として計算する錢遣い)が始まっている所もありますが、多くは藩札発行とともに錢匁遣いが始まる地域が多いことから、今のところ次のように考えられています。つまり、西日本の貨幣流通は藩の領主財政と領外取引に従事する商人層では銀遣いだが、藩領内、とりわけ農村・山間地域では錢遣いという二層構造である場合が多かったため、藩は二種貨幣をリンクさせる方策として錢匁札を発行したわけです。この際、錢匁内実が固定型の地域では、錢相場の変動にかかわらず札の価値は一定錢貨量のままでしたから、その藩札は銀札

から錢札に転化したことになりました。しかも、広島藩のように、銀札のままの地域ではたびたび札価が低落して、札騒動が生じているのに対し、錢匁遣い地域では比較的安全的に流通し、伊予松山藩札のように、一八七一年の藩札整理以降もなお数年間、旧領内で使用された事例を見ることもできます。

錢匁札や錢匁遣いについては、まだ明らかでない点が多いですが、江戸期藩札がこれまで理解されていた以上に複雑で、しかし藩が領内の貨幣流通実態に応じてけっこう合理的な通貨政策をとっていたことを垣間見ることはできるでしょう。



姫路藩では、藩士の階級ごとに定めた慶弔時の贈呈金額を藩へ納付させ、代わりに慶弔用に鯨札(左)、弔弔用に昆布札(右)を交付し使用させるなど、各藩において特殊な用途の藩札もあった。

赤字=日本 黒字=世界

27 NICHIGIN 2008 NO.16